

教育講演、第3回日本在宅看護学会学術集会、2013. 11. 16（東京）、日本在宅看護学会誌、2(1)、78、2013

在宅看護学における知の創出 — 質的研究と科学をめぐる誤解を解く —

高木 廣文（東邦大学看護学部長・教授）

（1）【略歴】

昭和49年3月 東京大学医学部保健学科卒業

昭和54年3月 東京大学大学院医学系研究科保健学専攻博士課程修了（保健学博士）

昭和54年7月～55年6月 米国 NIH Visiting Fellow（米国環境保健研究所研究員）

昭和57年4月～平成元年7月 聖路加看護大学助教授

平成元年8月～11年3月 文部省（当時）統計数理研究所助教授

平成11年4月～18年3月 新潟大学医学部保健学科教授

平成18年4月 東邦大学医学部看護学科教授

平成21年4月 東邦大学医学部看護学科長

平成23年4月 東邦大学看護学部長、現在に至る

【学会等】日本学術会議連携会員、日本看護科学学会代議員、日本国際保健医療学会代議員、公益財団法人生存科学研究所専務理事

（2）【抄録】

ヒトを対象とする研究では、その研究形態により量的研究と質的研究に二分することがある。量的研究の科学性を問題にすることはほとんどないのだが、質的研究の科学性を問題にすることがある。しかし、質的研究の科学性を議論する場合、まず質的研究とは本質的にどのような研究なのかを考える必要がある。そして、さらに科学とは何かを明確にしておかなければならない。

現象の本質論から、私は自然事象（モノ）を研究対象とするのが「量的研究」、心的存在の中に生起する現象（コト）を扱うのが「質的研究」であると大きく区分している。

量的研究は、様々な現象を「測る」ことによりデータを収集するために、客観的であり再現性も高い。一方、人間の心的存在である主観的な内部世界の現象に関しては、共通理解を得ることが極めて困難であり、本来的に対象者からの言語による情報などがなければ、研究を行うことはできない。このように質的研究は、心的存在である内部世界の現象を解明するために行う研究であるといえる。すなわち、『質的研究とは、研究対象者（情報提供者）のある主観的内的世界に関する現象をテキスト化し、研究者が主観的にテキストを解釈し、その現象を再構築する研究である』といえるだろう。

多くの人たちは考え違いをしているのだが、科学とは因果関係を客観的に明らかにすることを目的とするような営為ではない。基本的な科学哲学の考え方であるポッパーの反証主義やクーンのパラダイム論などは科学理論を考える上で有用であるが、私は構造主義科学論の立場から質的研究の科学性を考えている。すなわち、『科学とは同一性（構造や形式）の追求であり、科学理論（モデル）の善し悪しは、目的とする現象をいかに上手に説明できるかによる』というのが私の立場である。このように科学というものを捉えると、特定の現象を説明するために構造、理論、モデル、システムなどを仮定して行う研究は、量的か質的かを問わず科学的な研究と考えられる。しかし、そのモデルにより現象説明が上手いかなければ、他のよりよい理論に変更されることになる。

質的研究で最も批判が集中する主観的であると言われるテキスト解釈の問題についても、最近の言語学の考えを踏まえ、構造主義言語論的なアプローチからその妥当性について考えてみたい。